

五千石遺跡

GOSENGOKU SITE

— 4区・5区発掘調査概報 —

2008

長岡市教育委員会

株式会社 大石組

例 言

- 1 本書は、新潟県長岡市寺泊敦ヶ曾根地内の大河津分水路河川敷に所在する五千石遺跡の4区・5区の発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査は、大河津分水路可動堰改築事業に伴い、長岡市が国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所から受託し、平成19年4月から平成20年3月に実施した。
- 3 発掘調査にかかるすべての費用は、国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所が負担した。
- 4 発掘調査は、長岡市教育委員会が主体となって行った。調査にあたり長岡市は、調査にかかるすべての作業を株式会社大石組に委託した。
- 5 五千石遺跡4区は、西半を燕市教育委員会、東半を長岡市教育委員会で分担し調査を行った。よって本書では、長岡市教育委員会が担当した4区東地区について報告する。
- 6 出土遺物及びすべての記録類は、長岡市教育委員会が保管している。
- 7 本書の執筆は、駒形敏朗（長岡市教育委員会）、加藤由美子（同）、岩松和光（大石組遺跡調査事業部）、竹部佑介（同）、南波守（同）、神林康子（同）、松井奈緒子（同）がこれにあたり、文末に

執筆者名を記した。また、竹部・南波が編集を行い、加藤が総括を行った。

- 8 調査から本書の作成まで、多くの方々からご協力、ご教示を賜りました。記して御礼を申し上げます。
（敬称略・五十音順）

荒川隆史 高濱信行 滝沢規朗 津田憲司
戸根与八郎 水澤幸一 宮本長二郎

平成19年度調査体制

調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）
管理	山屋 茂人（科学博物館 館長） 小林 和之（同 館長補佐） 駒形 敏朗（同 副主幹）
監督	加藤由美子（同 学芸員）
調査組織	株式会社大石組
現場代理人	田中 博明（大石組遺跡調査事業部）
調査担当	岩松 和光（同）
調査員	竹部 佑介（同） 南波 守（同）
調査補助員	神林 康子（同） 松井奈緒子（同）

調査の経緯

五千石遺跡の発掘調査は、大河津分水路可動堰改築事業に伴い、事業主体である国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所から受託された長岡市・燕市両教育委員会が、平成18年度から実施している。可動堰改築事業に係る五千石遺跡の面積は33,500㎡と広大なため、長岡市・燕市両教育委員会は調査にあたって5つの調査区を設定し、平成18年度は長岡市が1区、燕市が2区の調査を実施している。

調査2年目となる平成19年度は、長岡市が5区及び4区の17ラインから東半を、燕市が4区の17ラインから西半の調査を担当した。確認調査によって2層の遺物包含層が知られている5区は、今年度は上層のみの調査を行い、下層の調査は次年度に行うこととした。また、東西に調査区を分けた4区は、長岡市・燕市両教育委員会で、調査に対する考え方や遺構・遺物の状況を共有しつつ調査を進めた。平成19年度の長岡市の調査対象面積は、4区東地区（上下層）が6,410㎡、5区（上層）が2,310㎡である。

平成19年4月2日、長岡市は国交省と五千石遺跡発掘調査業務の契約を締結し、発掘調査にあたった。4月下旬、4区東地区で重機による表土除去作業を開始。同時に、調査区周辺の暗渠掘削を行う。この暗渠掘削の過程で、当初は1面のみと考えていた遺構確認面が、2面（V・VII層）存在することが明らかとなった。また、調査区を南北に横切る幅約4m、深さ約1.0mの古墳時代後期の水路が見つかり、大量の木質遺物の出土が予想されたため、今後の調査方針の抜本的な見直しが求められた。

5月10日、作業員を動員し、4区上層（V層）の本格的な発掘作業を開始した。7月上旬からは重機による5区の表土除去及び暗渠掘削作業に着手。6月14日、4区上層の航空写真撮影を行い、その後、4区下層（VII層）の調査に入る。8月下旬、作業員の半数を5区の調査に配置し、5区における本格的な発掘調査を開始した。9月8日、現地説明会を実施し266人の来場者を得た。同20・21日、4区下層の航空写真撮影、さらに10月16日に5区の航空写真撮影を行った。同19日、全ての発掘調査を終了し、引き続き整理作業に着手した。

（加藤）

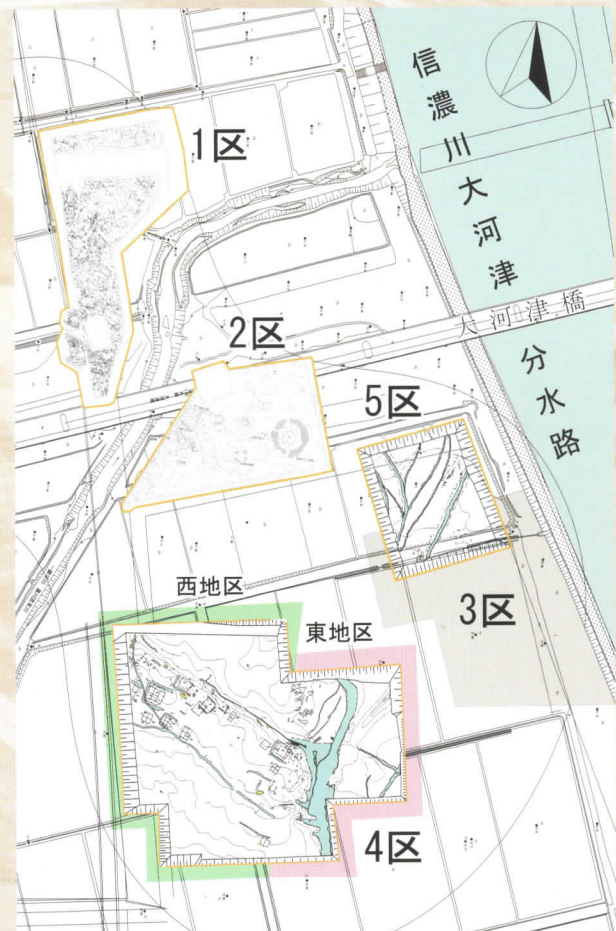
平成18年度調査の概要

平成18年度は、五千石遺跡の最北部に位置する1区を調査した。基本土層序は7層にわかれる。VI層は、おもに古墳時代前期の遺物が出土する遺物包含層である。灰色シルト質土のVII層は遺構確認面で、縄文時代晩期から古墳時代前期の遺構を確認している。

特に古墳時代前期の遺構群は、周溝を持つ掘立柱建物跡1棟を中心に、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡8棟、土坑3基によって構成されており、信濃川左岸に新たに発見された集落域として注目される。調査区北西隅で検出されたテラスを持つ土坑SK01は、赤彩された丸底壺や小型丸底壺、二重口縁壺の口縁部などが使用された位置関係を保った状態で出土し、ここで祭祀が行われた可能性が考えられる。

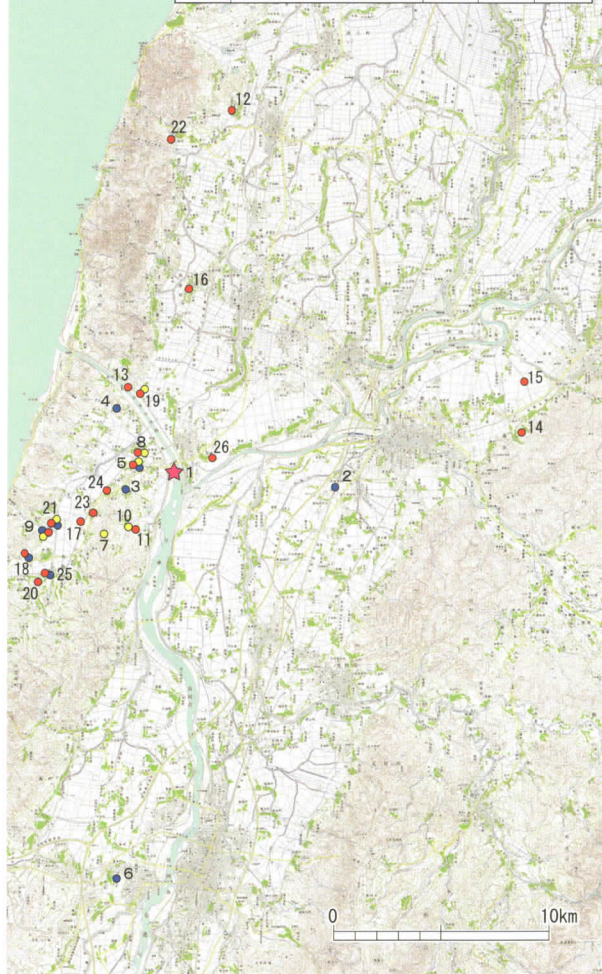
主な出土遺物には、縄文時代晩期、弥生時代中・後期、古墳時代前期の土器がある。その他に縄文時代の石刀・石鏃・石錐や、弥生時代のアメリカ式石鏃といった石器類をはじめ、管玉、ヒスイ製の勾玉などの石製品が出土した。

（岩松）



第1図 五千石遺跡調査区（1：3500）

番号	遺 跡 名	縄文	弥生	古墳
1	五千石遺跡	●	●	●
2	長畑遺跡	●		
3	松葉遺跡	●		
4	幕島遺跡	●		
5	横滝山遺跡	●	●	●
6	藤橋遺跡	●		
7	赤坂遺跡群		●	
8	諏訪田遺跡		●	●
9	奈良崎遺跡	●	●	●
10	屋鋪塚遺跡		●	
11	大久保古墳群			●
12	菖蒲塚古墳			●
13	夕暮れの岡遺跡			●
14	保内山王山古墳群			●
15	吉津川遺跡			●
16	稲葉塚古墳			●
17	門新遺跡			●
18	八幡林遺跡	●		●
19	竹ヶ花遺跡		●	●
20	下小島谷古墳群			●
21	大武遺跡	●	●	●
22	山谷古墳			●
23	五分一稲場遺跡			●
24	土手上遺跡			●
25	下ノ西遺跡	●		●
26	上町遺跡			●



第2図 五千石遺跡と周辺の遺跡（1：350000）

国土地理院平成17年発行の1：50000「内野」「新潟」「弥彦」「新津」「三条」「加茂」「長岡」「守門」を元に作成した。

立地と環境

現在の五千石遺跡は、大正11年に通水した信濃川大河津分水路の河川敷に立地する。遺跡周辺は東頸城丘陵の先端部に位置し、信濃川の氾濫原と自然堤防が入り込んだ地形をしており、過去の洪水の痕跡が遺跡内の土層にも認められる。一帯の地勢は、信濃川の治水と利水を担う大河津分水路の完成により景観を変えているが、かつての蛇行流路に伴う自然堤防や微高地の一部は、遺跡と共に遺存している。

五千石遺跡周辺の縄文時代の遺跡には、晩期の松葉遺跡、幕島遺跡などが知られている。

弥生時代は玉作関連の諏訪田遺跡（中期）、高地性集落の可能性をもつ赤坂遺跡群（後期）、竹ヶ花遺跡などが存在する。また、信濃川左岸の東頸城丘陵の先端には屋鋪塚遺跡（後期）が知られており、検出された方形台状墓の墓坑内破碎土器供献は、石川県以東では今のところ発見例がない。東頸城丘陵一帯には、この後の古墳時代前期にも古墳が継続して営まれていく。

屋鋪塚遺跡に隣接する大久保古墳群は、前方後方墳2基、方墳1基、円墳5基で構成される。また、丘陵を挟んだ島崎川上流には前方後方墳3基からなる下小島谷古墳群が存在する。これより下流の奈良崎遺跡では、2基の円墳が調査されている。夕暮れの岡遺跡は、滑石製子持ち勾玉と須恵器提瓶の出土が伝えられており、付近に古墳が存在した可能性が考えられる。五千石遺跡は、これらの古墳とやや距離を置いた位置関係にあり、三条市の保内三王山古墳群と吉津川遺跡は、墳墓と母村の関係を知る上で参考になる。

島崎川流域では、古墳時代の集落や水田遺構が確認されている。大武遺跡では前期の水田跡や水路、井戸と共に多量の遺物が出土しており、その南西に位置する奈良崎遺跡では前期の集落が確認されている。前・中期の門新遺跡では現在の水田下に水田跡が確認されている。古墳時代後期では五分一稲場遺跡、土手上遺跡をはじめ、下ノ西遺跡、北野丸山遺跡などの、遺構を伴わないが遺物を出土する遺跡が知られている。

古代に入ると白鳳期の瓦が出土した横滝山廃寺跡をはじめ、門新遺跡、下ノ西遺跡、「沼垂城」「高志君」木簡で著名な八幡林遺跡などの古志郡衙関連の遺跡が、島崎川流域を中心に分布する。（岩松）

平成19年度の調査概要

4区は、V層（上層：古墳時代後期）とVII層（下層：縄文時代から古墳時代前期）の2面を調査した。燕市が調査を行った西地区では、西から東へと延びる馬の背状の微高地に古墳時代後期の集落が展開している。東地区の上層では、集落の東側を限るように南北に流れる水路（SD11）が確認された。水路は下層期に掘り込まれるが、その後洪水層（V層）によって若干埋没し、上層の時代に掘りかえされ再び機能する。覆土中から、堰の痕跡と見られる杭列を4か所検出した。遺物は、多量の木質材に混じって、土師器、甕などの須恵器、木製農具や田下駄、弓、建造物の転用材、石製模造品、石製品、種子などが出土している。

水路には中小の溝が流れ込んでおり、一段掘り下げられた岸边のテラスは、水路西側に展開する集落と密接な関係を保ちながら、機能したと思われる。下層では、弥生土器が出土した井戸状遺構S X 417を検出している。

5区はV層（上層）の調査を実施した。検出された遺構は、両肩に盛土を持つ幅約1m余りの溝が3条、幅0.8mの溝が4条などである。4区で検出した溝（SD14）は5区に延びてくる可能性が考えられる。また、溝の周辺で、畦畔の痕跡と人の足跡とみられるピット群を検出している。出土遺物は少量の土師器片と植物遺体が出土した。（岩松）

基本層序

1区の基本層序と同じく、I層からVII層に分層できる。I層は大河津分水路通水後の洪水堆積層である。II層の黒色土は中世から近代にかけての遺物包含層で、珠洲焼や陶磁器類が出土している。5区より平安期の須恵器片が出土したIII層は、V層と同じく洪水によって堆積したと考えられる粒子の細かいシルト質の土で、III b層はガツボである。黒褐色土のIV層は古墳時代後期の遺物包含層で、V層の灰白色土が上層の遺構確認面である。VI層の黒色土は縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての遺物包含層であり、地点によってはさらに分層が可能である。

写真3では、SD11とSD12の切り合い関係が見えており、下層の遺構確認面であるVII層の下部には、自然流路の落ち込みが確認できる。（松井）



写真1 4区上層完掘状況（上が北）



写真2 水路（SD11）発掘調査風景

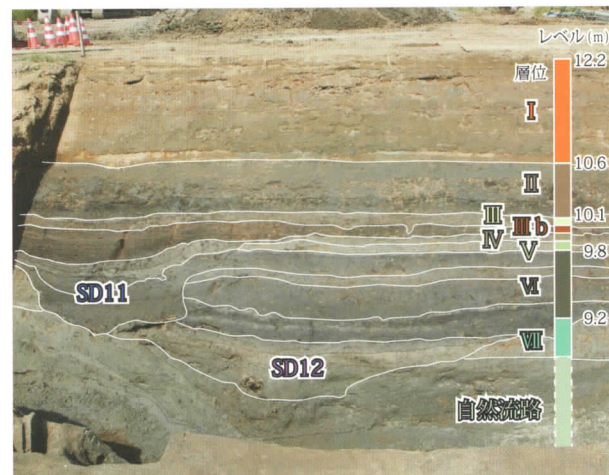


写真3 基本土層（4区北壁）

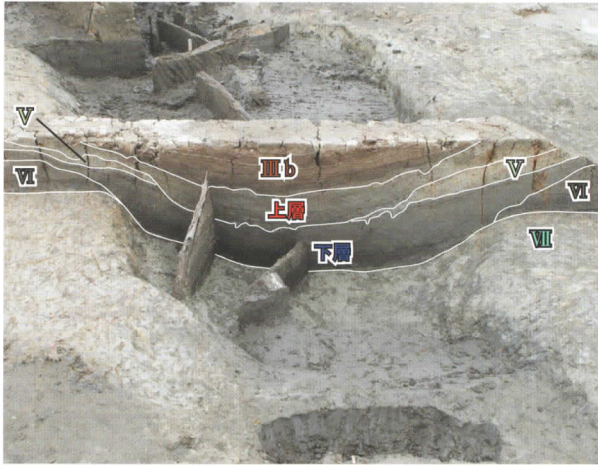
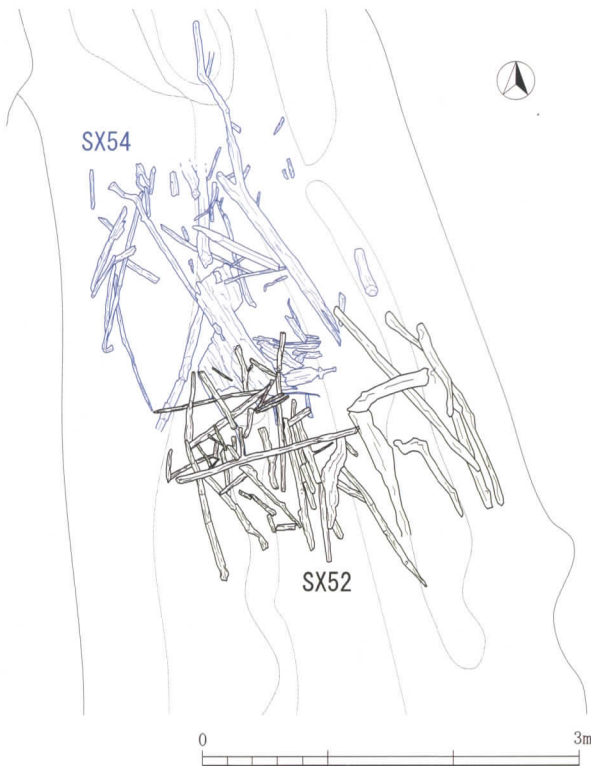


写真4 SD11セクション (南から)

	遺構	杭長(残長)/cm	杭角度/°	杭頭の傾き	杭間隔/cm
上層	SX54	145	32~34	∠南	20~100
	SX55	170	31~50	∠南	100~170
	SX58(直立)	160	≒90	—	90~190
	SX58(斜杭)	130	52	∠南	—
下層	SX57(西側)	62~212	35~52	∠北	0~16
	SX57(東側)	39~129	53~66	∠北	2~24

表1 SX54・SX55・SX57・SX58杭検出状況



第3図 SX52・SX54平面図 (1:60)

4区東地区検出遺構 (第6図)

V層面から古墳時代後期の遺構、VII層面から古墳時代前期以前の遺構をそれぞれ検出した。下層面の遺構は上層面に比べて少ない。第6図では上層遺構を赤色、下層遺構を黒色で示してある。

SD11 東地区を南北に貫く水路で、上層ではSD14などと関係を持ち、下層ではSD12を切って流れている。規模は長さ80m以上、幅は3.2~3.8mで最も広い所では5.0mを測る。深さは0.7~1.0mで、18AFグリッド付近で最大1.3mになる。断面は台形状で、底からの立ち上がりは急である。18・19AF~AHグリッドでは、両岸辺にテラスが設けられる。覆土は上と下に大きく2分でき(写真4)、上層から古墳時代後期の土器が、下層から後期と前期の土器が出土している。土層セクションの観察から、下層埋没後に上層のSD11が改めて掘削されたことが読み取れる。また、堰と考えられる遺構として、上層でSX54・SX55・SX58、下層でSX57を検出した(表1)。

SX55は18・19AGグリッドにあり、上層で確認した堰の中では最も北に位置する。堰の一部と考えられる杭列が検出された。その約3m南にはSX58があり、直立杭とそれを支える斜杭が確認された。最も南側の杭列SX54(第2図)は、19AHグリッドにある。水路と直行する柵状に倒れた木材、樹皮材が検出されたSX52と一体構造を持ち、堰の機能果たしていたと考えられる。後述するSD14に水を引いたと推察できる。これら上層の杭列は、SX58の直立杭を除き、すべて南側に頭を傾けて下層の覆土に打ち込まれており、南からの水流を受けていたと判断できる。

下層で検出された杭列SX57(第3図)は、19ABグリッドに位置する。上層の杭列とは逆に杭頭を北に傾け、流れの向きと直交するようにSD12の覆土に打ち込まれている。杭間隔が列の中央でやや広くなることから、通水口の役割を果たしていたと考えられる。杭列の南側では、同一堰の構築材と思われる杭材が散在しており、当時は北から南へと水が流れていたことがわかる。このことから、SD11の流れの向きは、上層と下層とでは逆転していたと考えることができる。

上・下層の、底面付近からは多く遺物ののが出土した。主な出土遺物に、土師器、須恵器などの土器があ

る。また、ナスビ形農耕具（鋨）、鋤、弓、建造物の転用材（Y字状柱・有頭垂木・台輪・板材・調度品部材）などの良好な木質遺物が出土した。岸辺のテラスからは石製模造品、石製の勾玉や管玉、白玉が出土している。

溝 上層でSD14、SD17などの中小の溝を多数検出した。下層ではSD11より古い自然流路であるSD12のほかに、SD11に合流し、用排水路の機能を持つと考えられる。SD20、SD50などを確認した。

SD14は21AE～20AFグリッドを流れ、全長は16m以上、幅0.9～2.5mで、深さは0.1mと浅く、断面は弧状を呈する。SX54によってSD11から分水され、そのまま北へ流れていくと考えられる。5区で検出された溝との関係が注目される。

SD12は19AB～21ACグリッドで検出され、規模は全長23m以上、幅は5.4～7.8m、深さは0.8～1.0mである。断面形は緩やかな弧状を呈する。出土遺物は炭化木と植物遺体のみである。下層で検出されたことから、古墳時代前期以前の自然流路と考えられる。

土坑・焼土 17AE～AHグリッドのIV層上面およびIV層中で、炭化物の散在が認められた。その直下でSX32・SX34・SX35・SX39の焼土集中地点を検出している。SK21は100×90cmの平面楕円形で、深さは46cmである。土坑底面から直径約40cmの粘土塊が出土した。これらの土坑や焼土は、出土遺物よりいずれも古墳時代後期の遺構と思われる。

SX56 調査区北、19・20ABグリッドで検出された帯状の遺物の広がり、土師器の他、勾玉、管玉、田下駄が出土した。遺物の出土状況から溝の痕跡であると考えられ、時期は古墳時代前期と捉えられる。SD11およびSX57に近接しており、相互関係の把握が今後の課題となる。（南波）

SX417 SD11の東側、20AFグリッドに位置する。深さは約100cm、平面は長軸約130cm、短軸約110cmの楕円形である。断面は上部の約4分の1が朝顔状に開き、そこから底部に向けてほぼ垂直に掘り込まれ、直径約60cmの円筒形を呈する。常時湧水しており、他の遺構と比べても深いことから井戸と思われる。覆土は8層に分けられ、炭化物を特に多く含む4つの層から弥生時代後期の土器片などが出土した。（松井）



第4図 SX57平面図（1：60）



写真5 SD11下層（南から）

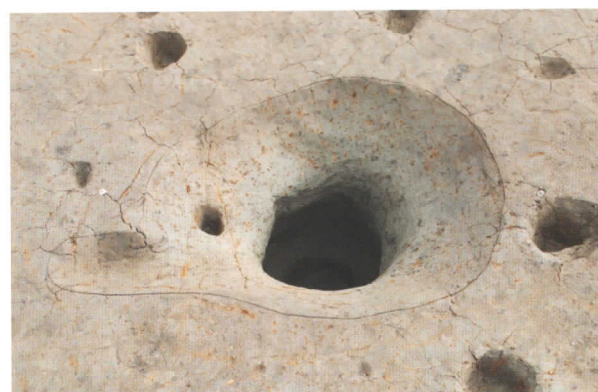


写真6 SX417完掘状況（北東から）



VI層遺物出土状況



S108 出土 器台 (39)



SB11-SP598 出土 柱材



S106 出土 壺 (45)



S104 出土 管玉 (32)



VI層出土遺物 高杯 (95)



SD70 遺物出土状況



S110 出土 器台 (78)



VI層出土 石鋸 (100)



SD66 横ずれのセクション (南から)



SD72 出土 壺 (70)



SD71 出土 高杯 (58)



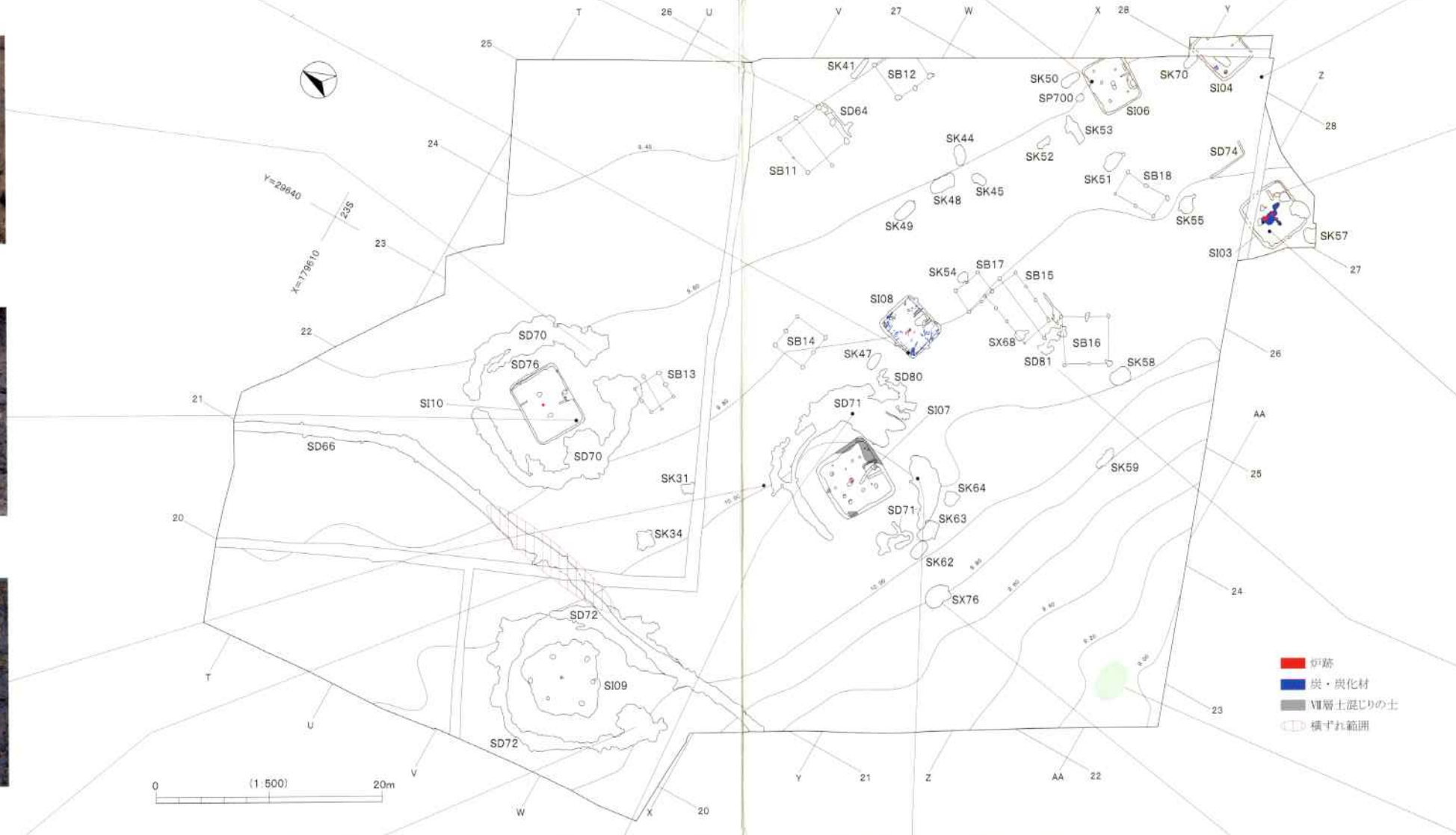
SD71 出土 器台 (61)



SX76 出土 板材



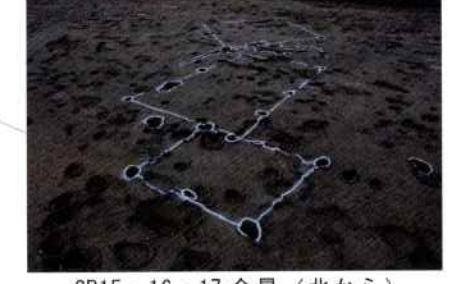
土器集中地点 (91~94)



S103 出土 緑色凝灰岩の剥片・管玉未成品



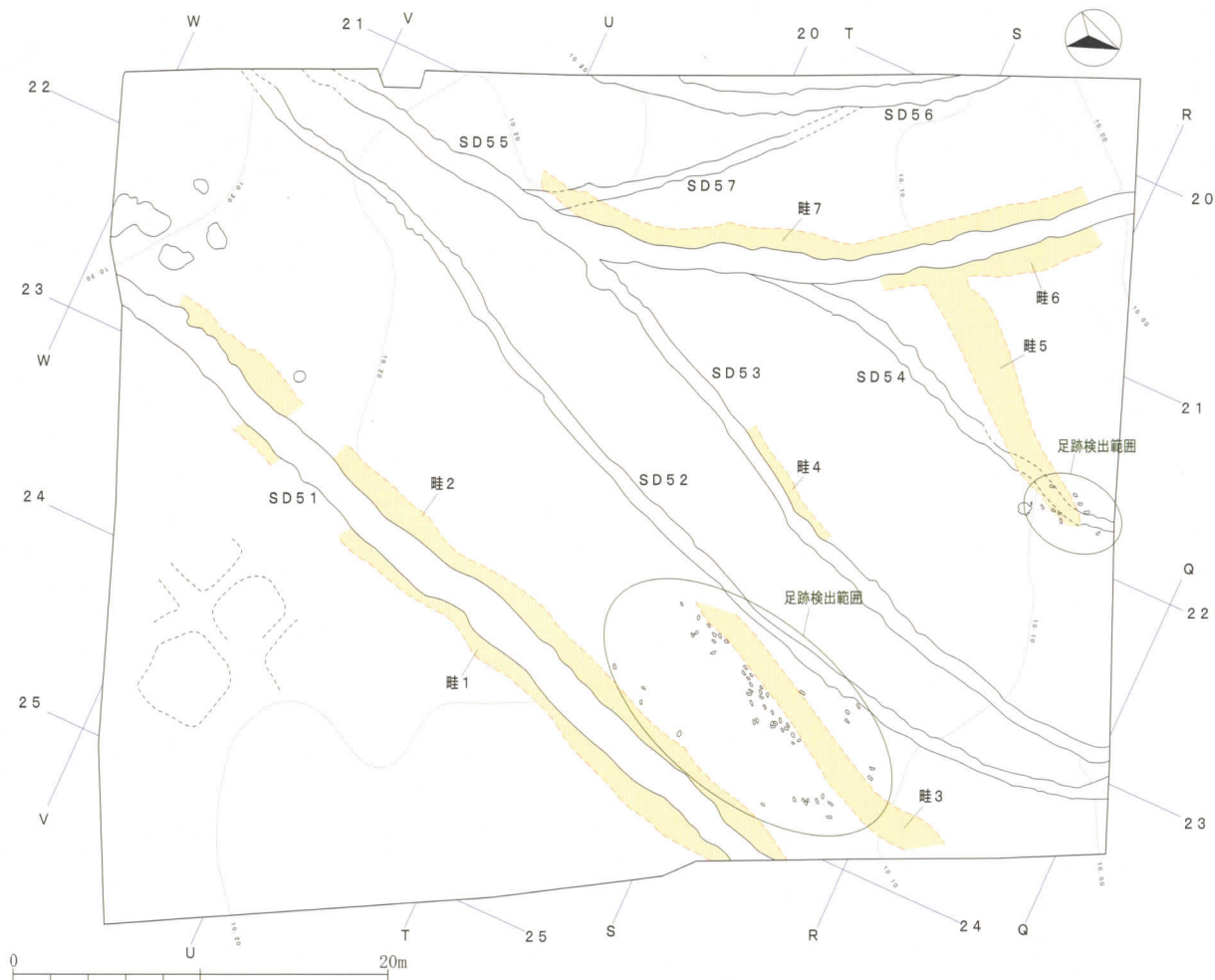
S103 出土 管玉未成品 (20)



SB15・16・17 全景 (北から)

第4図 3区下層平面図 (1:500)・状況写真

—キャプション中の遺物番号は第5・6図に対応する



第7図 5区平面図（1：400）



写真7 5区完掘状況（南から）



写真8 足跡検出状況（南西から）

5区検出遺構（第7図）

V層上面で、7条の溝（SD51～57）、盛土帯（畦1～7）、ピット群を検出した。遺物は土師器の細片がわずかに出土した。遺構・遺物ともに確認された層位から、古墳時代後期のものと考えられる。

溝は幅1mを超すSD51・SD55・SD56と、幅が0.8m前後とやや細いSD52・SD53・SD57の2グループに分けられる。SD55とSD54・SD57に切り合い関係がみられ、狭い溝から広い溝へ切り替わっている様子が確認された。

最も幅の広いSD51の両肩には、盛土帯（畦1・畦2）が溝に沿って伸びる。その西（23Q～23Sグリッド）にも、SD51および畦1・畦2とほぼ並行する盛土帯（畦3）が検出されている。畦2と畦3に挟まれた地区は、V層にIV層がマーブル状に混ざった土が面的に広がり、人為的な攪拌を受けたと考えられる。盛土帯を畦畔、溝群が用水路とした場合、この地区に水田が広がっていた可能性もある。また畦3に沿って検出された長軸約20cmのピット群は、水田耕作時につけられた足跡の可能性も考えられる。（竹部）

出土遺物（第8図・第9図）

IV層とVI層から、縄文時代晩期・弥生時代中～後期・古墳時代前期・古墳時代中期末から後期にかけての遺物が、コンテナで約30箱出土した。出土量は上層よりも下層の方が多く、上層では4区西地区の掘立柱建物域に遺物が集中する。また下層遺物は、SD11岸边に広がるテラスや、SX56付近に集中する。上・下層とも主体となるのは、古墳時代中期末から後期にかけての土師器であり、下層から古墳時代前期の土師器が定量出土している。ここでは主に出土量の主体をなすSD11出土遺物を採り上げる。なお、31以外は4区からの出土である。

古墳時代中・後期の土器（1～31） ほとんどが土師器であり、須恵器は6点しか出土していない。

SD11出土の須恵器は甗（1・第6図）と甕胴部片（2）がある。甗は肩の張る胴部に短い頸部がつく。頸部と胴部最大径の2箇所に楕円波状文、肩部に1条の沈線が巡り、陶邑編年のTK23型式に比定される。甗・甕とも破損箇所を漆でついで形跡があり、大切に使用していた様子が見える。

土師器は坏・鉢・高坏・壺・甕が出土している。坏（3～19）の大半は、内面が黒色処理されている。口縁が頸部で屈曲し外傾するものが多く、口縁部が短いものと長いものに分かれる。口縁が屈曲せずに内湾するもの（3～5）も少数含まれる。頸部内面を螺旋状にミガキ上げる手法が目立ち、この他に内面全体に横位のミガキが施されるもの（4・7・13）も見られる。5・12・13・15は一次調整時のハケ目が残る。18は底部外面、10は体部下半に「×」印のヘラ記号が描かれている。5は金属器を模倣したとも考えられ、時期がやや下る可能性がある。

高坏（21～24・写真11・12）は全て短脚で、坏と同様に黒色処理されたものが大半を占める。21はほぼ完形で、SD11の西側テラス付近の水路内から出土した。坏底部に「×」印、その周囲と口縁部内面に1条の「○」印のヘラ記号が描かれている。

壺（25・写真13）はほぼ完形で出土した。時期がさかのぼる可能性もあるが、出土層位から後期とした。

甕（26～30）は長胴化が進む以前のもので、胴部に丸みがある。27は比較的胴が長く、6世紀の中頃から



写真9 SD11遺物出土状況・坏



写真10 SD11遺物出土状況・坏



写真11 SD11遺物出土状況・高坏



写真12 SD11遺物出土状況・高坏



写真13 SD11遺物出土状況・壺



写真14 S X417遺物出土状況・弥生土器



写真15 SD11出土木製品（縮尺不同）



写真16 SD11遺物出土状況・白玉

後半にかけてのものと考えられる。

須恵器の甕は5世紀末だが、土師器坏の口縁部の伸長度合や、4区西地区で1点のみが確認され、東地区では確認されていない須恵器模倣坏の割合などから、4区の主体となる時期幅は6世紀の前半と考える。時期が下る可能性のある遺物も含まれる為、時期幅の詳細な検討が今後の課題である。また当該期の土器は、SD11内では層位をまたいで接合する個体もある。各層の時期差をその有無も含め検討する必要がある。

古墳時代前期の土器 (32~55) 土師器(甕・壺・高坏・器台・ミニチュア製品)がある。甕(32~34)は口縁がくの字に屈曲して開く。古墳時代前期に特有の小型丸底壺(46・47)や小型器台(54・55)などが出土している。(竹部)

縄文時代・弥生時代の土器 (56~60) 56は包含層VI層から出土した縄文時代晩期(大洞C段階)の浅鉢である。57は弥生時代中期の甕の肩部で、ハケ目の上に6条1単位の平行線文と、5条の楯描扇状文が明瞭に残る。包含層VI層から出土し、SD11下層からも同一個体とみられる破片が出土した。甕58は、口縁部に縄文と簡略化された交互刺突文が施文され、天王山式系の特徴を持つ。SD11上層から出土した。59・60はS X417からの出土で、甕59(写真14)は口縁端部を上下につまみ出し、刺突列点文を施す。弥生時代後期、近江地方の影響を受けている。60は口縁端部がわずかに内湾し、頸部に平行沈線を残す、東北系と思われる壺である。(松井)

土製品 (61~63) 土錘が6点出土した。小型の61は全体に煤が付着し黒色を呈する。

木製品 (写真15) SD11から農耕具・建築部材などが出土している。写真15は右から田下駄、ナスビ形農耕具、鋤2点、弓である。

玉類・石製模造品 (64~79) SD11の西側テラスから有孔円板が3点、勾玉・管玉が各1点出土している。SD11の東側テラス床面では、写真16の白玉55点が連なった状態で見つかり、東西のテラスで総数144点の白玉が出土した。S X56からは勾玉が1点、管玉が2点出土している。また17AFグリッドSP551の直上より、剣型の石製模造品(70)1点が出土している。67は包含層VI層より出土した。(神林)

まとめ

平成19年度の五千石遺跡発掘調査は、平成18年度発掘区から60mほど離れた4区と、5区を調査した。4区は、西側を燕市教育委員会が、東側を長岡市教育委員会が市域分担して発掘調査を進めた。

5区は、建物跡などの集落を構成する遺構は確認されず、遺物も少ない。だが、鋤などの木製農具が出土した4区に隣接していることや、水路や水田の畦のような高まりが確認されることなどから、水田跡の可能性を検討する材料がある。今後、植物遺体の分析などを参考に検討する課題の一つである。

次に、燕市の調査成果を参考にしながら4区の状況をまとめたい。4区は、東西に延びる馬の背状の自然堤防上に、矩形に周る溝をもつ大型の建物跡（SB6）と、10棟以上の建物跡、それに井戸跡などによる集落跡である。自然堤防の南北で、細くて浅い溝が自然堤防と平行して走り、東側は水路（SD11）が南北に入って自然堤防を切っている。大型の建物を中心とする4区の集落は、南北は細い溝で、東はやや大きい水路で区切られた自然堤防上に展開していた。水路SD11で隔てられた東側は、直径1mほどの落ち込みがあるが、建物跡などの遺構は確認されず、集落の外という認識があったものと思われる。

集落が機能していた時期は、出土遺物から5世紀末から6世紀代が中心の古墳時代後期である。ほかに縄文時代晩期や古墳時代前期の遺物が、4区集落の主体をなす古墳時代後期の文化層（IV層）より下層（VI層）などから出土し、断続的に集落などの場として使用されていたことが分かった。

集落の主体をなす古墳時代後期の遺物は、土師器、須恵器、玉類、祭祀に関する石製模造品、それに弓、鋤と思われるナスビ形農耕具、鋤などがSD11から出土している。

土師器は、壺、甕、坏、高坏、器台、鉢など、集落遺跡で一般的に見られる器種がそろっている。食膳具の坏は、その大半が内面黒色処理されており、10%ほどが内外面ともに黒色処理が施されている。4点出土した高坏のうち3点に内面黒色処理が施されている。特に内面を黒色研磨処理する傾向が、坏や高坏に見られるのも五千石遺跡4区の特徴のひとつである。

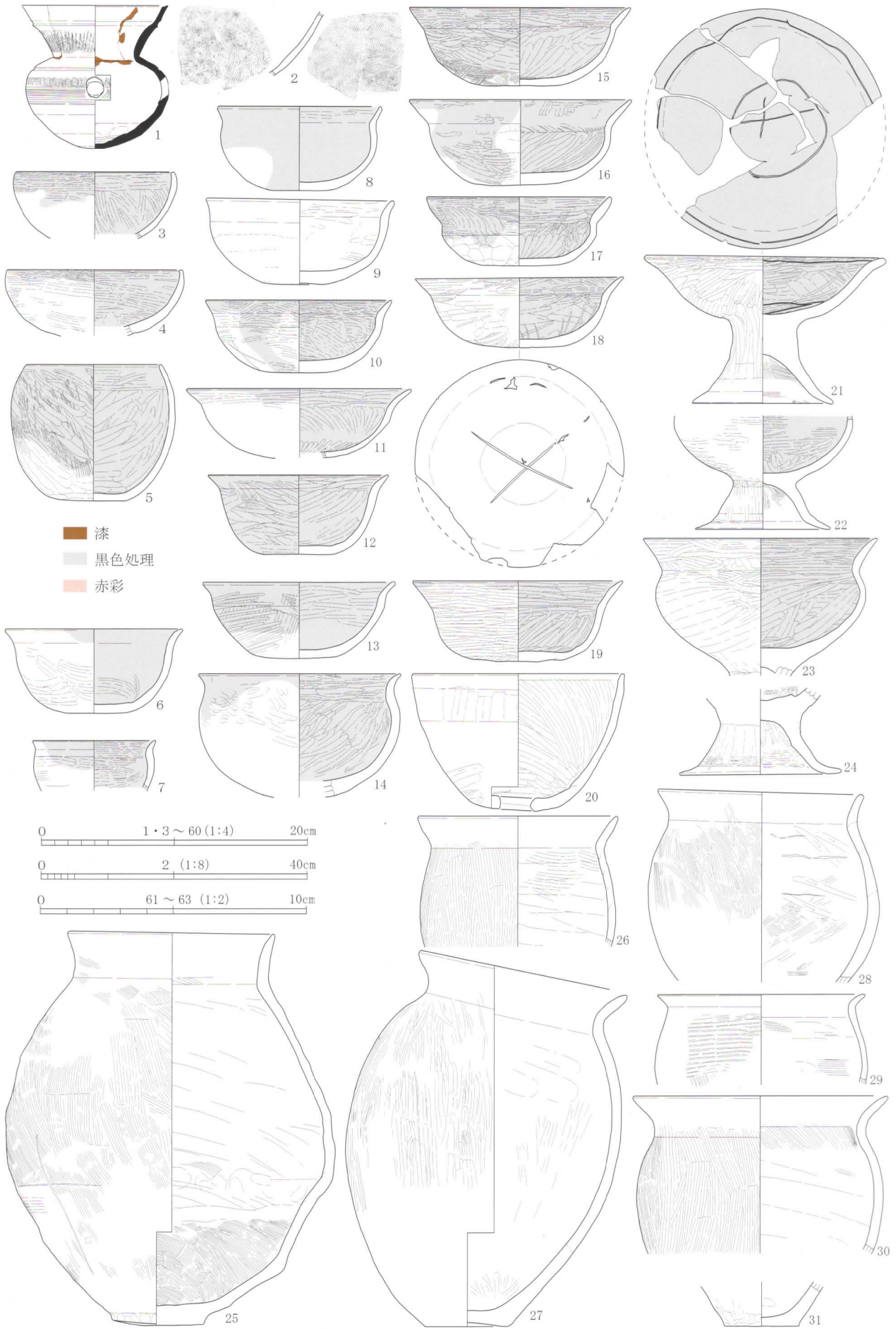
5世紀末から6世紀代といえば、須恵器の生産がヤマト政権の管理下にあった陶邑窯（大阪府）から徐々に地方へ生産が拡散していった時期である。新潟県で須恵器の生産が始まったのは、7世紀後半ごろからと言われている。4区からは、県内での須恵器生産が始まる前の、5世紀末ごろに陶邑窯跡群のTK23相当の須恵器の甕や、大甕（燕市側）、それに食膳具の坏と蓋が出土している。五千石遺跡4区で出土した須恵器の甕、甕、坏は、遠方の須恵器生産地から運ばれたものと考えられる。

また、4区集落の東端を区切るSD11からは、ナスビ形農耕具などの木製品のほかに、2点出土の勾玉すべて、4点の管玉のうち1点が、水路の中からの出土である。SD11の岸辺のテラスからは約140点出土している白玉の大半が、それに祭祀に関係すると考えられる鏡を模したと言われる有孔円板は3点ともテラスにあった。そろばん玉のような胴部に穴が開いている特異な形態で、酒容器と考えられる甕も水路の中からの出土である。

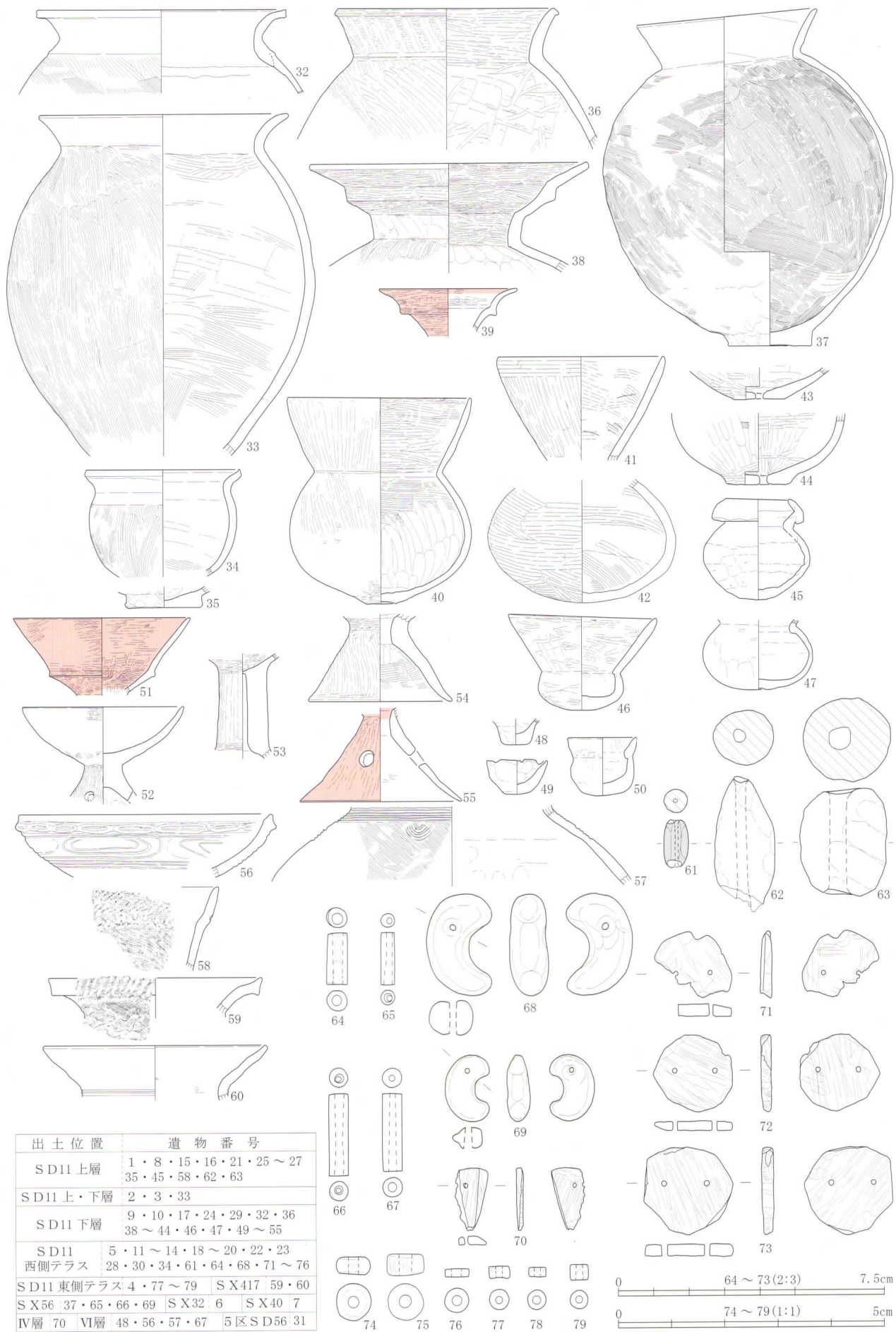
集落の東を区切る水路およびテラスに、祭祀用の道具として使われる有孔円板をはじめ、甕、勾玉などが集中していた。水路SD11の近くで、水に関する祭祀を行っていたのであろうか。それとも集落内で執り行われた祭祀に使った品々を水路に流したのか。今後、検討する課題の一つに上げられよう。

五千石4区の発掘調査は、当時の日本の中心勢力であったヤマト政権が、地方勢力との結びつきを強め、日本を統一する過程にあった5世紀末から6世紀代における、ヤマトから遠く離れた地方の集落の様子を伝えている。今後、調査資料の整理・研究を通じて考えていくことがらである。（駒形）





第8图 出土遺物1



出土位置	遺物番号
SD11 上層	1・8・15・16・21・25～27 35・45・58・62・63
SD11 上・下層	2・3・33
SD11 下層	9・10・17・24・29・32・36 38～44・46・47・49～55
SD11 西側テラス	5・11～14・18～20・22・23 28・30・34・61・64・68・71～76
SD11 東側テラス	4・77～79 SX417 59・60
SX56	37・65・66・69 SX32 6 SX40 7
IV層	70 VI層 48・56・57・67 5区SD56 31

第9図 出土遺物2

報告書抄録

ふりがな	ごせんごくいせき							
書名	五千石遺跡							
副書名	4区・5区発掘調査概報							
巻次名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒形敏朗・加藤由美子・岩松和光・竹部佑介・南波 守・神林康子・松井奈緒子							
編集機関	長岡市教育委員会・株式会社 大石組							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2-1 電話番号 0258-32-0546							
	〒940-0081 新潟県長岡市南町2丁目4番4号 電話番号 0258-35-5511							
発行年月日	2008年3月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごせんごくいせき 五千石遺跡	ながおかしてらどまりつるがそね 長岡市寺泊教ヶ曾根 つぼめしごせんごく 燕市五千石 おおこうづぶんすいろかせんじま (大河津分水路河川敷)	152021	1250	37° 37′ 04″	138° 50′ 04″	2007年 4月26日～ 10月18日	8,720 m ²	大河津分水路可動堰 改築事業 (事業主体：国土交通省 北陸地方整備局信濃川 河川事務所)
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
集落跡	古墳時代 前期・後期	水路跡・井戸状遺構 土坑・焼土集中地点		土師器・須恵器 土錘・石製模造品 勾玉・白玉・管玉 木製品(ナスビ形 農耕具・弓・田下駄) 杭		古墳時代後期の堰を持つ 水路跡を検出。覆土から 木製品と石製模造品など の祭祀遺物が出土。		

五千石遺跡 - 4区・5区発掘調査概報 -

2008(平成20)年3月19日印刷

編集：長岡市教育委員会
株式会社 大石組

2008(平成20)年3月24日発行

発行：長岡市教育委員会
印刷：株式会社 第一印刷所